

第17章 アメリカ・カリフォルニア調査報告

山本真鳥

1 調査概況

カリフォルニア大学バークレー校にて研究休暇を過ごす身であったために、カリフォルニアでのフィールド調査を依頼されることとなった。何とかやってみましょう、と二つ返事でお引受けしたが、実際の調査は難航を究めた。どうしてかという理由は簡単で、対象者が余り見つからないのである。そもそも南太平洋大学のエクステンションを抱える諸国・諸地域の出身者がいないことはないのだが、高等教育機関在籍者や卒業者となるとこれが思いのほか少ないのである。何とかつてを辿って見つけてインタビューを行ったのだが、厳密な意味では今回の対象からは若干外れる人もあった。それでも参考資料としては価値もあろうかと、収録する次第である。

居住の関係で、サンフランシスコ湾岸地域に調査地域を限ったのであるが、まずはこの地域の南太平洋出身者の構成について始めよう。そもそも、南太平洋大学を支える地域は、もともと英国や英連邦諸国（オーストラリア・ニュージーランド）の旧植民地や統治地域であるために、この地域出身の海外移民のほとんどはニュージーランド・オーストラリアに集中している。また海外移民が多いのはポリネシア地域の島嶼国であり、フィジーを除くメラネシアからの海外移民は少ないし、またキリバスからの移民はハワイを除けば多くが島嶼域内に集中しているのである。

それでは、合衆国内にいる島嶼国の移民はというと、このメジャーなルートはアメリカ領サモアを経由してであり、アメリカ領サモア人とそこを通じて入ってきた西サモア人とトンガ人である。

そもそもひとつの文化・言語を共有するサモア諸島が、西サモアとアメリカ領サモアに分離されているのは、19世紀終わり頃の列強の植民地獲得競争の結果にほかならない。サモア諸島をめぐるのは、軍港を求めるアメリカと、経済開発をねらうドイツと、太平洋の覇権を主張する英国との3つどもえの争いとなったが、トンガを保護領とする排他的権利を得ることで英国は手を引き、アメリカは軍港候補地のツツイラ島以東を、ドイツは経済開発に有望な西のウポル・サバイイ両島を掌中に収めることで決着をつけた。

こうしてアメリカ領サモアは今世紀の始まる頃から合衆国の非統合海外領土となり、この住民は戦後間もなく合衆国国民（市民と違って連邦議会への代表権はもたないが、合衆国パスポートがもらえる）として、本土への移住が思いのままとなった。1951年までここにはアメリカ海軍の基地が存在したのであるが、この年に海軍はここを引き払ってハワイのパールハーバーに移動することになり、サモア人兵士・軍属とその家族の多くが転勤にともなって移住した。これがきっかけとなって、アメリカ領サモア人のハワイ・本土への恒常的な移住が始まったのである。現在ではアメリカ領サモアの人口よりも多いサモア人が合衆国内に居住している。

東西に分離されて後も、もともと親族も双方にまたがっていたし、通婚も行っていた両サモア人は互いに行き来していたのだが、1950年代後半にアメリカ領サモアに魚の缶詰工場ができると、西サモアからアメリカ領サモアへという人口の流れは恒常化していった。アメリカ領サモアからは、合衆国、とりわけハワイ・カリフォルニアに若年人口を中心に大きな移住の流れが存在し、そのために、缶詰工場はいつも労働者不足であり、それを補うように西サモアやトンガからアメリカ領サモアに移住してくる人々がいた。現在、アメリカ領サモアの人口でアメリカ領サモア生まれの人は約5分の3程度である。その半数ほどが西サモア生まれで、大分差は開くが、その次に多いのがトンガ人である。西サモア人といってもその多くはアメリカ領サモア人の親類がいたり、またアメリカ領サモア人と結婚していたり、というふうにアメリカ領サモアの社会の中に組み込まれていることが多いし、2世代目になれば何方かの親が西サモア生まれであっても、アメリカ領サモア人としてのアイデンティティを選択する人が大半である。

さて、西サモア人やトンガ人は、アメリカ領サモア人と異なり、合衆国への移民が自由自在にできる訳ではない。近親者に既に市民となっている者がいる場合には、その人にスポンサーとなってもらい移住することが可能だが、それも年々厳しくなっているようである（ただし配偶者と老親はこの限りではない）。最初はただの旅行ビザや学生ビザで入国したまま、オーバーステイヤーとなり居ついてしまった人もいる。とりわけ、西サモア人より既居住者のネットワークの少ないトンガ人の場合、オーバーステイヤーの比率はさらに高いといわれている。

このように、サンフランシスコ湾岸地域の太平洋諸島民の構成は、多くはアメリカ領サモア出身のサモア人と、それに境界が不分明ながら西サモア出身のサモア人を加えて構成するサモア人コミュニティ、それにトンガ人コミュニティのふたつが主である。（実際にはハワイからカリフォルニアに移住したハワイ人人口の方が数値の上では多いのだが、こちらは既に生粋のアメリカ市民である上に、新しい太平洋諸島民の移民のようにコミュニティを成していないのである。）

一方、南太平洋大学を支える島嶼国が、フィジー以外に奨学生を送り込んでいる国は、やはりオーストラリア・ニュージーランドが主であり、東西文化センターやモルモン教系のブリガム・ヤング大学ライエ校のあるハワイを除けば、合衆国内には若干の大学院奨学生がいる程度のようなものである。合衆国には沢山いるはずのアメリカ領サモアからの奨学生ですら、比較的授業料の安い中西部の大学に入学する例が多らしく、極少数しか会ったことはない。

という訳で、サンフランシスコ周辺で行ったこの調査には、奨学生としてこの地にやってきたまま居ついてしまったというケースはない。そもそも奨学生として当地にやってくる人がほとんどいないのだから、それも無理ない話だ。強いていえば155番は、大学生ではないながら、大学でのコースを受講するジャーナリスト用の奨学金をもらって来ていたのであるが、私のインタビューのうちでは例外的である。しかも、短期間の養成講座を終えた彼女は、当初の計画通りもとの職場へと帰っていった。

インタビューに応じてくれた人の組合せは雑多である。出身地別からいくと西サモア出身者が5人、トンガ出身者が3人、フィジー出身者が2人。その中には無論合衆国の市民権を得てしまった人も、市民権を得ていないまでも永住するつもりの人も含められている。

もともと、サモア移民の調査も行っていた関係で、サモアン・アフェアーズ・オフィスとい

うソーシャル・サービスを行っている団体に出入りをしていたのだが、ここで西サモア出身の大学生または大学卒業者を教えて欲しいと頼んだところ、彼らのネットワークにもひっかかる該当者が実に少ないことが分かった。このオフィスは西サモア・アメリカ領サモアという区別なしにソーシャル・サービスを普及しようと努力していたこともあって、何でわざわざ東西の区別をつけるのだと厳しい質問を受けた。実際、スタッフの中には、アメリカ領サモア出身ながら高校時代の1～2年間を西サモアに〈留学〉していた者もあり、厳密な区別は難しい場合も多いのである。155番と156番はここを通じて紹介してもらったのだが、146番と149番は私の前々からの知り合いである。

155番のインタビューの後、彼女と同じプログラムにフィジーからの参加者がいることを知ったが、事情があるのかインタビューには応じてくれなかった。しかし間接に聞いた話では、カリフォルニア大学バークレー校にフィジー系の学生団体はないそうで、彼もフィジー人に会えずに寂しがっていたという。知り合いの南太平洋大学ファカルティにはるばるスヴァまで電話して教えてもらったのが、144・145の素敵な御夫婦である。このふたりは、インド系フィジー人のカテゴリーに入るのだが、インド系にせよフィジー系にせよ、サンフランシスコあたりに大学卒業者の知り合いはいないということだった。

トンガ人に関しても、サモアン・アフエアーズを通して見つけられるだろうと思ったのは、やがて甘い考えであることがわかった。少なくとも、トンガン・アフエアーズとか何とかいうソーシャル・サービスの団体があってもよさそうだと、思って電話帳を引いて見つけたのがトンガ領事館である。トンガは移民のための旅券事務を行う他に、観光開発や貿易振興のためにアメリカに一箇所だけ領事館を置いているのだそうだが、それがサンフランシスコだったのだ。このルートを通じて、3人の魅力的なトンガ女性に会うことができた。さらにまだ、紹介してくれる可能性はあったが、そろそろ期限切れであったので、残念ながらここで打ち切りにした。

一方、ニウエ移民の研究をしているカリフォルニア大学サンフランシスコ校の研究者がいたのだが、彼女もサンフランシスコ周辺在住のニウエ出身の大学生・卒業生は知らないとのことだった。ここらでこれ以上の追求はあきらめた。

2 ケースの分析

ここでは、さまざまな背景をもったインタビューイーを、人生の基盤がどこにあり、どう変化してきたかで次の3つないし4つに分けて、考察することが可能であろう。すなわち、本国をベースにしているが一時的にサンフランシスコ湾岸地域に滞在しているのをA型とするが、厳密にこれにあてはまるのは147番だけである。155番は、現在仕事をもち居住しているアメリカ領サモアを西サモアの延長として考えるならば、このカテゴリーにはいるが、アメリカ領サモアにいるということ自体が、既に移民しているのだというならば話は違ってくる。これはA'型としようか。

さらに、幼い頃両親と共にこの国にやってきた1.5世で、アメリカ人と競争しつつ初等・中等教育を終え、高等教育まで行ったのが、150番、151番ということになるろうか。これをB型と呼ぼう。

学問ないし階級上昇の夢を抱いて故郷を出てきたのをC型とするならば、残りの144番、145番、146番、148番、149番、156番はこれにあてはまる。

まずはC型からいこう。このグループのうち大学を卒業してから来ているのは、144番だけである。145番は家族の都合で学業半ばにしてフィジーを出国することになってしまったが、その後苦学して大学を卒業するのである。家族からの援助が全く期待できず、授業料も生活費も自分で稼ぎ、ひとり苦勞しながら大学に挑戦した彼の経験には、苦学という表現がぴったりである。

145番がフィジーを出国したのは独立が契機であり、独立を境としてインド系住民には風あたりがきつくなるという予想の下に一家そろって出国した。フィジーにあった財産は持ち出しが許されなかったために、アメリカに来てからの暮らしは決して豊かではなかった。145番にしてみれば、移住は親が勝手に決めてしまったことで、スヴァの大学や友達に未練もあり、また幼い頃慣れ親しんだ南国に若干のロマンチズムももっているのがあった。妻のビザをとるために、自分の永住権を市民権に書き換えて、フィジーのパスポートを放棄してしまうことになったが、これはごく最近のことである。フィジーに帰って暮らすという可能性も全く棄てているわけではない。

一方、南太平洋大学を卒業して、キャリア・ウーマンとして仕事をしていた144番がフィジーを出国したのは、インド系排斥の1987年クーデターのせいである。スヴァの中流勤労者家庭を営んでいた彼女の家族は、この後みなオーストラリアに移住してしまった。私たちはあの国のために働き尽くしたのに、あの人たちは私たちの功績を認めようとはしないのだ、と淡々と語る彼女は、〈私たち〉と〈彼ら〉の間にある越えがたい溝を見てしまったという風で、もう二度とあそこを〈くに〉とは思わないという固い決意が伺われるのであった。

145番、144番の夫婦は共働きで、幼い子ども2人とサン・マテオの小ざれいな賃貸アパートに住んでいたが、太平洋諸島からの通常の移民のようにコミュニティをなすことはまるでないようだ。145番の家族とは交流があり、またインド系の友達もいるのだろうと思うが、実際には、フィジー・ヒンディー語を話す機会はほとんどふたりの間だけだと言っていた。また、職探しにしても、インド系のつてを辿って探すこともなさそうだ。ふたりともインド系がフィジーでは伝統的土地にアクセスのないことを反映してか、幼い頃より教育しか身につけるものはないのだから、これだけはしっかりやるようにと親にたたきこまれたという。たとえばサモア人やトンガ人も教育熱心だといわれるが、彼らとはひと味違った、他には頼るものはないという厳しい息込みが、この二人には感じられた。

この国は人種差別もあるのだろうが、西海岸の都市に住んで中産階級の生活をしている限りでは、それを敏感に感じとるほどではない、と145番はいう。アメリカに来る前は極めて反米的青年だったが、今はこの国の政治システムや機会均等主義を評価している。144番に家族のいるオーストラリアに行く気持ちはないかと訪ねたのだが、世界のナンバーワン・カントリーに永住権がもらえるのに何をいまさら、といわれてしまった。

146番、149番、156番はともに西サモア出身者で、最初政府奨学金を得てニュージーランドないしフィジーに留学したが、それぞれの事情から失敗した経験をもつ。146番は両親も含め家族がほとんどアメリカに来てしまっているために、フィジーにいた必要がなくなった以上、

サンフランシスコに出て来たのは当然かもしれない。一番入りやすいサンフランシスコ市立短大から始めて、4年制の大学へ転入することを考えている。(インタビューの時点ではまだ分からなかったが、やがて第一志望のカリフォルニア大学バークレー校には蹴られたものの、第二志望のサンフランシスコ州立大への転入が決まった。おめでとう!) 彼はフィジーでの自立の経験をなつかしく思うとともに、ここで汚名を挽回して、是非とも故郷に錦を飾らなくてはと固い決意をしている。アメリカで様々なチャンスに恵まれることに魅力を感じながらも、やはり故郷のサモアが懐かしく学業を終えたらともかくも帰国して就職することが望みである。

156番は、ニュージーランドから帰省してしばらく西サモアで働いた後、用意周到にもアメリカ領サモア人の資格をもって本土に渡り、やがて海軍に入り、看護兵としての訓練を受けた。軍隊はアメリカ領サモア出身の若者には、立身出世のひとつの道として注目されているが、それは様々な資格や訓練がただで受けられる上に、大学のコースなども開講されているために、やる気さえあれば奨学金の代わりになるといってもよいからなのだ。彼はこの制度を利用して好成績の単位を集め、西海岸の名門校の学士号をとり、さらにニュー・イングランドの名門校にて行政学修士号をとり、再びカリフォルニア大バークレー校で弁護士資格をめざし勉強をしているところだった。

このように書くと、いかにも立身出世型のもうアメリカ人化してしまったエリート・サモア人という感じがする。しかし実際には、進学までの合間やまた通学中のアルバイトとして、サモア人向けコミュニティ・サービスやホームレスのための非営利団体等々で働く一方、西サモアの自然環境の悪化に注目して、3年に1度の帰省の度に郷里の湾の水質検査を行っている青年である。先進国のリベラルな政治運動の影響を受けて、西サモアではまだ新しいトピックである環境保護や外国人居住者の選挙権の問題(後者の問題提起は私には初耳である)に関心をもつ。当然のように、やがてはサモアに帰って人々のお役に立てるような職に就くことも考えている。あるいは職でなくとも、タロイモを作りながらの奉仕活動でもよいという。しかし、それがいつのことかという、まだこれから環境問題でPhDをとろうという計画もあるために、余り具体的ではない。

148番は、やはりニュージーランド留学失敗組である。彼は149番と共にアメリカにやってきて、扶養家族を養わなければならないという現実と直面していたために、仕事に明け暮れることになってしまったが、そうした条件がなければ、あるいは前2者のように再び大学に挑戦していたかもしれない。空軍の採用試験に合格したものの、国籍が西サモアであったために入隊できなかった経験をもつ。父がアメリカ領サモア人であったから、書類上の不備さえなければ国籍要件はクリアできていたはずなのだ。

様々な職を転々とした後に、ニュージーランドで勉強した機械工学の知識を生かして中古車販売の仕事に入り、やがて独立した。セールスの仕事は結構できる方なのだが、上司とうまくやっていくのが苦手で、あんまり儲かってはいないが今の自営の方が気楽でよいという。ただし今は景気がよくなくて中古車業界も過当競争である。そこで車のエンジン・オイルに特別なオイルを足すとエンジン・オイルの持ちが違ってくるのだが、この特別なオイルを独占販売する契約を結んで、新しいビジネスを始めたところである。投資をしているので、今はあまり儲かってはいない。(後でわかったことだが、妻149番は早朝からパン屋でアルバイトをして、生活を支

えている。)

現在のところビジネスの相手は特にサモア人に限られてはいないが、安い中古車を現地に輸送するサービスも含めて、サモア人・トンガ人に販売することを考えている。またビジネスがうまくいけば、サモアに支店をもち、行ったり来たりして両方のサモア人コミュニティに奉仕したいと思っている。実際、彼はサモア人の教会でもリーダーであるし、サモア人コミュニティの行事を組織したり、サモアでのサイクロン被災救援活動を行ったり、ラジオ番組に出演したり、コミュニティ活動も相当行っている。そうした活動は、そのようにして培った人脈が後に財産となるかもしれないから、商売に全く関わりがないとはいえないが、当面のところサモア人のいいお得意さんというのは少ないようである。またサモア現地にも深い関心を寄せ、時々帰省もしている。

149番は148番の妻であり、奨学金留学ではないが、中等教育の途中からニュージーランドの寄宿学校にいき、大学まで進みながら続かず、中退した経験をもつ。今の夫とサモアで出会い、示し合わせて一緒にアメリカに出てきた。夫のビジネスを手伝うと同時に、夫の奉仕活動でも助手役を果たし、生活費を稼ぐためのアルバイトもして、5人の子どもの育てて、という忙しい生活をしている。忙しいのにぐちをいうのではなく、もともと消極的な方で自分だけだとそんなに活躍して回ることなど考えられないのだが、積極的な夫のリードする事業や活動に参加していろいろな経験を積むことができるのを楽しんでいる様子でもある。そんな忙しい生活をしていても、将来もしも余裕ができれば、近くのコミュニティ・カレッジで作文やビジネス等のコースをやってみたいとも思う。実際アメリカに来た頃にコミュニティ・カレッジに入ろうかと思ったが、ビザがまだちゃんとしていなかったために断念している。ニュージーランドの大学に行っていた時には、自分が何を勉強したいのか分からず、またそれを強いて見つけようと努力もしなかった。親のいうままに大学に進み、親のいうままに大学を中退したわけだが、今ではもう少し、自分で何がしたいのかも分かっている。

以上のC型に比べて、幼い時からアメリカで生活しているB型のインタビューー、150番と151番の経験はもっと無理の少ない自然な感じがする。もちろん家庭で英語を話していないバイリンガルの生徒ーという聞こえはいいが実際は、移民の子、という意味ーの場合、正規の英語授業にややハンデが生じやすいのだが、それでも大学入学年令を過ぎてから留学するのに比べれば、大学の授業もずっと楽にこなせる。

150番の両親はトンガでも階層が上の貴族の出身で、学歴もあるし、アメリカに来てもしっかりの仕事を得て、ミドル・クラスの生活を実現しているようである。4人兄弟姉妹の長女。家庭は、トンガ人のアイデンティティは保ちながら、アメリカ的な教育も取り入れている様子。現在25才。小学校からほとんどアメリカで始めたも同様に、カリフォルニアにある2つの大学で、経営学と歴史学で学士号を、また国際関係論で修士号を修めた。現在の職は学士号の方の経営学で学んだコンピューター関係の知識を生かした、コンピューター・デザイナーの仕事で、これで相当の収入を得て、ロー・スクールに行くための貯金をしている。また、白人の婚約者がいて、近い将来に結婚の予定。環境問題に関心があり、グリーンピースの活動に興味があるし、最近ドイツに会議で行ってとても強い印象を受けた。

自分のことはアメリカ人であると思っている。全くのトンガ人として暮らすのには抵抗があ

り、白人と婚約する結果になったのも、それと関係があるだろう。しかし、教会の活動を通じてトンガ人コミュニティとも大いに関わりはもっている。トンガ人の親は仕事に忙しくて子どもはほったらかしておくために、最近青少年のギャング問題が目立つ。何としてもこれを防がなくては。コミュニティ・ワーク・センターを作ろうと思っている。またトンガ人は他のエスニック・グループと関わりを避ける傾向が強いが、これを矯正するためにも役立てればと思っている。また、故郷のトンガには、修士論文のフィールド・ワークとして数カ月滞在した。これも2年に一度訪ね、将来は仕事で滞在もしてみたいと思う。

150番も、10才頃からアメリカで教育を受けているトンガ人。両親はアメリカ領サモアで3年間も働いてアメリカへの渡航費を貯めたという。親はあまり教育もないし、こつこつ働いて娘たちに将来を託したと見える。下に4人妹のいる長女。教育こそは財産というのが家訓のようである。年老いた両親はリタイアしているので、生活費も稼ぎながら、やはり将来の学費を貯金している。大学は何とかこなししたが、学資の見通しがたたずに何度やめようと思ったことか。スタンフォード大学の教育学部博士課程に入学予定。コミュニティ・カレッジから始めてここまで進んでいる努力家である。トンガの社会体制、すなわち絶対王制には多いに疑問をもっているが、しかし博士号取得後にはトンガに帰って仕事をしたい。スタンフォードのPhDといってもアメリカではただの人だが、トンガに帰ればひとかどの人物になれるから、といったのがとても印象的だった。

最後にA型のインタビューイーに戻ろう。147番はトンガでも既に親の代から高等教育にアクセスできた家庭の出身で、中等教育の後半を自費留学でニュージーランドで終え、その後政府奨学金を得てオークランド大学を出た後、トンガ開発銀行で然るべき職を得ていた。さらに政府奨学金で、ニュージーランドにて経営学修士となるために数カ月勉強したところで、サンフランシスコ領事に任命されることになり、学業を中断して夫と共に3人の子どもを連れて赴任したのである。

しかし、経営学修士号にも未練があり、最近になってカリフォルニア大学バークレー校の経営学部がサンフランシスコで開講している夜学に入学して勉強を始めた。領事の任期は近く満了するが、その後も留まって修士号を取得したい。もともと政府の要請で学業を中断しているので、昼間のコースに変えて奨学金留学という形で継続できるのではないかと考えている。最初は修士号の資格のみ考えていたが、授業にはとても興味もてるし、トンガの将来にも大変役に立つコースであると思う。世界に通用するディグリーなので、トンガにも有用である。しかし、銀行で仕事を続けるにしても自分で事業を始めるにしても、生活のベースはあくまでもトンガにあると強調していた。

155番は、西サモアでのユネスコ放送トレーニング・プログラムに参加した後に放送ジャーナリストになった女性。家族は皆ハーフの家庭の出身で、サモア的慣習にどっぷりつかることのない生活。やがて夫と共に子ども5人を連れてアメリカ領サモアに移住し、今は新聞記者。国際ジャーナリスト・トレーニング・プログラムでバークレーに滞在中。プログラム終了後は帰国の予定。サンフランシスコのサモア人コミュニティに関心をもち、記事にまとめることを考えている。その他ワシントンDC等で訓練も行うこのプログラムはとても役に立つし楽しい。学士号も欲しいし、もっと様々なプログラムに参加したいが、家庭があるのでそう簡単ではな

い。アメリカ領サモアは、西サモアよりずっと給料もいいし、物価も安く生活しやすい。また親族も近くにいて始終会えるし、気候も合っているから、このまま住み続けることになるだろう。2つの世界が楽しめる場所なのだ。西にもどることは考えていないという。

3 まとめ

以上、インタビューの記録を私なりにまとめてみた。多彩な人々に巡り合えて楽しいインタビューができたのはうれしい。私のインタビューイーをひとまとめにして論じるということは不可能であるし、サンフランシスコ周辺地域の高等教育出身者としての代表性をもつのかどうか分からないのだが、気付いたことをおおよそ以下の事項に絞って論じてみたい。

まず、いずれも更に高い教育を受けることに興味をもち、現在の資格以上に機会があれば上の資格を求めようとしている点である。146番、147番、155番、156番は現に在学中。また151番は近々入学予定。144番、145番も夜学のコースに通っている。150番もロー・スクールに入ることを望んでいる。148番と149番は、現在の状況からはちょっと難しいが、挑戦してみたい気持ちにはもち続けている。ニュージーランドでの奨学金留学に失敗した高学歴者がインタビューイーに多いのも偶然ではなかろう。日本で入試に失敗した学生がしばしばアメリカに行くように、サモアからも再起をかけてアメリカでの機会を利用するのである。チャンスの国アメリカなのだ。

アメリカの大学教育については、双方の大学に通った経験者から思ったよりも程度が低いという評価が下されていた。これは、今回のインタビューに限らずあちこちで言われる意見でもあるが、太平洋諸島出身者の通う大学が、授業料や推薦の都合上、どうしてもやや低い方の大学に集中している点も指摘しておかなくてはならない。アメリカの一流大学は彼らにはまだ遠い存在でもある。現に一流大学に通っているインタビューイーから程度が低いといった意見は出なかった。

一方、USPについて、資金が不足している点や、講師がニュージーランド・オーストラリア等に偏っている等々の欠点を上げながらも、多くの人々が積極的評価を下している点は頼もしい。地域に焦点を合わせたよいカリキュラムがあるという点での評価がもっとも多いようである。ニュージーランドの大学を失敗した時点で、帰国かUSP転入かという選択を迫られた156番は、セカンド・チョイスに行くことはプライドが許さず、帰国してしまったのだが、今考えるとUSPに行っておけばよかったという。その時は頑なに第2の道を拒否してしまったけれども、今ならUSPを選んでいるだろうという彼のことは忘れられない。

A型は無論のことだが、B型、C型を含めて、出身国との距離が近いのは意外な事実であった。「石もて追わるるごとく」国を出た144番以外は、出身国に身近な関心をもち続けている。1.5世の150番、151番は最近帰国訪問して国の様子を自分の目で確かめ、151番は博士号取得後には帰国して職を得ることを望んでいる。また150番は2年ごとに帰国して繋がりを保っていききたいという。滞米生活の長い145番、149番、156番も定期的に帰国して故郷の親族・知人との交流を楽しんでいる。148番だけは飛行機恐怖症なので自分でいくことはしないが、母親に来てもらっているそうだ。

また、149番、156番はともに現地の同胞組織にも関わりをもち、活動を行っている。B型の150番、151番も同様である。教育を受け、アメリカ社会の仕組みが他の同胞よりもよく見えるだけ、同胞の欠点や弱点がよく分かっているし、そうした点を何とかするための社会奉仕にも取り組んでいる。

しかし、いずれもアメリカに永住するかときかれれば、将来の帰国の可能性を否定しない。アメリカでそれなりにエスタブリッシュした生活がありながら、故郷との太いパイプに繋がれている点は、実に興味深い。（もっともインド系の144番・145番はスタンスのとり方が他とは違っている。）この裏には、151番の、「博士号をとってトンガにいけばひとかどの人物になれるから」ということばが示すように、高い教育を受ければ受けるほど故郷からの引力が高まるということもありそうだ。教育エリートが少ない小国出身者の特徴ともいえようか。日本人1世には、「ひと儲けして故郷に錦を飾る」というのが願望であったけれども、太平洋諸島出身者にはとっては「ひと勉強して故郷に錦を飾る」という生き方がひとつのモデルとなっているように見受けられた。